

ふるさととは 語ることなし

風のごとくく 坂口安吾

坂口安吾は、大宰治、織田作之助らとともに戦後文壇で活躍した、新潟県出身の偉大な作家です。代表作の「堕落論」、「白痴」は戦後の混乱期の社会に多大の衝撃を与えました。没後四十余年を経た今、安吾の作品は時代を超えて新鮮な共感を呼び起こし、日本人の心の指針として読まれています。

坂口安吾が作家として登場し注目されたのは、大学卒業後、文学仲間と創刊した同人誌「青い馬」で「風博士」という作品を発表した時、牧野信一がこれを激賞し、翌月に発表した新潟県松之山町を舞台にした黒谷村については、島崎藤村が認め、宇野浩二が推挙しました。この二作により新進作家として文壇に認められた。

坂口安吾の創作活動は短く、戦後の混乱期に多くの編み小説はもちろんだ、人々を魅了しました。その推理小説、歴史小説など、安吾の言葉が、戦後思想の形にわたっています。さら、原点として多くの人々の心に、評論でも熱弁をふるったの中に復活したといわれて

り目立った活躍はありませんでした。東京大空襲の焼け跡を安吾は、新潟へ疎開を勧めた兄安吾を振り切つて、見捨てます。この観察が戦後の小説家、坂口安吾を決定付けます。

戦争の焼け跡から生まれ「堕落論」戦争が終るまで、あまり反響を呼びませんでした。二月月太宰治、織田作之助とともに戦後文学の旗手として脚光を浴びたのです。

安吾とふるさと新潟

わんぱくだった少年時代

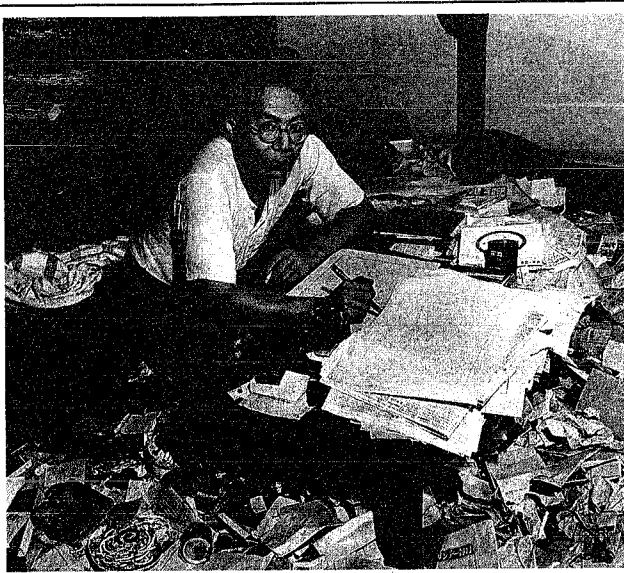
坂口安吾(本名「輝五」)は、明治三十九年(一九〇六年)十月二十日、西大畑町五七九番地に生まれ、丙午生れの五番目の男子ということで、炳五と名づけられました。

人生最初の挫折が

安吾の自伝的小説などによると、少年時代の安吾が変わるのは、中学校に入学したころの多感な時期、幼少から母と心が通わないと感じていた安吾は、学校へも行かず、寄居浜で一人孤独な日々を送ります。

安吾文学の起点に

安吾の自伝的小説などによると、少年時代の安吾が変わるのは、中学校に入学したころの多感な時期、幼少から母と心が通わないと感じていた安吾は、学校へも行かず、寄居浜で一人孤独な日々を送ります。



昭和二十二年十二月清田安方町自宅二階の書斎にて(撮影：林忠彦)



父をイメージさせる安吾像
長男 坂口綱男さん

それぞれの安吾像

父をイメージさせる安吾像に会いに来ています。新津に墓がありますが、安吾碑が父の墓のように思え、対面しているような気分になるからです。

初めて安吾碑を見たのは除幕式の時で、当時三歳でした。この石が何なのか分からなかった。思えば、口口の広い多くの読者がいて、それぞれの安吾がいて、それぞれだと思います。

初めて安吾碑を見たのは除幕式の時で、当時三歳でした。この石が何なのか分からなかった。思えば、口口の広い多くの読者がいて、それぞれの安吾がいて、それぞれだと思います。

一般人・常識人

坂口安吾

坂口安吾は、よく世乱時に起る作家だと言われ、いわゆる作家が再評価される時は、没後何十年とか、生誕何十年とかぐらいである。それは、多いに違っていない。



安吾の会世話人代表 齋藤 正行

最近では、手塚眞が安吾の映画「白痴」を新潟で新しく創り出したと言っていることでも分かる。時代、社会あるいは、個人の混迷した時に、安吾は呼び戻される。具体書で、最初に読んだ風博士落第がほぼ確実となり、父の指示で東京の豊山中学校へ転校させられた。中学校へ転校から、文学に深く親しむようになります。

安吾は、空と海と風の中にふるさとと愛を感じていたと語っています。二年から三年に連続する不良のため落第しました。挫折は家に対する反抗、極度の近視、嫌いな先生の授業に出たくなかったためなど、さまざまな要因があったといわれています。この後、安吾は二度目の

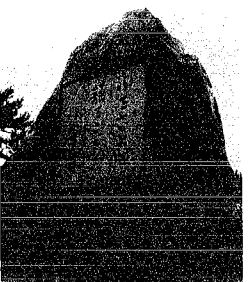
暗いイメージはない
面白い男でした
中学時代の同級生 小林力三さん

暗いイメージがありません。着をまじいスタートルから突進、途中にある落第校に隠れ、折り返して戻ってくる。先頭集団に加わり平坦と帰ってきました。先生も承認していました。そのことを人間らしく生きること、安吾はそれを教えた作家、新潟市長 長谷川義明

坂口安吾の軌跡

明治三十九年	十月二十日、西大畑町に父二郎、母アサの五男として生まれる。
大正八年	豊山新海中学校(現、県立新潟高等学校)に入学。二年後英語、博物などの教科で落第。
大正十一年	全国中等学校陸上競技会に参加しハイジャンプで優勝。
大正十四年	豊山中学校を卒業。代用教員となる。
昭和元年	東京大学印度哲学倫理学部に入学。在学中にフランス語塾「アブネ・フランセ」に入塾。
昭和五年	アブネ・フランセの仲間と同人雑誌「言葉」を創刊。
昭和六年	「言葉」が廃刊となり後雑誌として「青い馬」を創刊。五月「ふるさと」に寄る讃歌「エリック・サティ」(翻訳)などを発表。六月「風博士」を発表。母の一周忌で新潟に帰省。六月から十月にかけて新潟に滞在し「島影の乱」を執筆。
昭和十八年	「堕落論」「白痴」を発表し、脚光を浴びる。この年安吾の提言によって月刊にいた「新潟日報社」が誕生。「不連続殺人事件」で探偵作家クラブ賞を受賞。この年、芥川賞選考委員に推挙される。
昭和二十六年	「安吾春談」第二回文芸春秋読者賞を受賞。
昭和二十八年	長男綱男誕生。
昭和三十年	二月十七日自宅で脳出血を起こし、そのまま永眠する。葬儀で、川端康成などが弔辞を読み上げた。享年四十八歳。

少年の夢うずめた丘 そこに安吾碑がある



安吾が好んだ寄居浜を眺めるように建てられた記念碑

護国神社の表参道わきにある丘と呼ばれる丘状に「ふるさととは語ることなし」と刻まれた安吾碑があります。石には、安吾の告別式の日、尾崎士郎、磯田一雄らが提唱し、昭和三十三年に建てられました。高さ二・五メートル、重さ約二十五トンの巨岩からなる石像は、日本海を一望に見渡せる場所にあります。碑の側面には、安吾が少年の夢をうずめたこの丘に彼を記念するための碑を建て、昭和三十三年春、発起人代表、尾崎士郎と刻まれています。言葉の通り安吾はこの地を愛し、海と空を見てそして吹く風を感じていたのかもしれない。